

2022年度事業の概要

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査	22
平城宮跡等の発掘調査	22
企画調整部の研究活動	23
文化遺産部の研究活動	24
埋蔵文化財センターの研究活動	25
国際学術交流	25
公開講演会	27
科学研究費助成事業等	27
国が実施する事業等についての調査・協力	29
●平城宮・京跡の整備と情報発信	29
●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究	29
●キトラ古墳に関する調査研究	29
現地説明会	30

2 展示・公開

飛鳥資料館の展示	31
平城宮跡資料館の展示	31
解説ボランティア事業	32
図書資料・データベースの公開	33

3 その他

刊行物	34
-----------	----

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2022年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で2件、飛鳥地域で2件である。また、立会調査は11件である。以下、主要な調査成果の概要を示す。

藤原宮大極殿院の調査（第210次）は、大極殿の北方で実施した。周辺では、2019年度の調査（第200次）において東面回廊に取り付く大極殿後方東回廊を確認し、2021年度の調査（第208次）では、大極殿後方の基壇とそれに接続する後方西回廊の存在がはっきりとなった。これらの成果を受け、今回は大極殿後方基壇と後方西回廊の規模と構造、およびそれらの造営過程の解明を目的とした。調査面積は565㎡、調査期間は、5月9日から8月26日である。

調査の結果、大極殿後方基壇は東西約50m、南北約16mの規模で、後方回廊の基壇より南北に約3mずつ張り出す構造であることが判明した。周辺から多量の瓦が出土していることから、基壇上に瓦葺の東西棟建物が存在したと判断できる。この建物は、平面規模や大極殿との位置関係、平城宮との比較から大極殿後殿に相当し、後方回廊はそれに取り付く軒廊と考えられる。また、大極殿後方基壇に接続する後方西回廊は、後方東回廊と同じく桁行約4.1m（14尺）等間、梁行約2.9m（10尺）等間の礎石建ちで、瓦葺の複廊とみられる。

藤原宮東方官衙南地区の調査（第211-1次）は個人住宅の建替にともなって実施した。調査面積は16㎡と狭小であり、近現代の盛土層が厚く堆積していたため、藤原宮期の遺構面は確認できなかった。

飛鳥地域では、奥山廃寺（第211-6次）、石神遺跡東方（第212次）の調査をおこなった。

奥山廃寺の調査（第211-6次）は個人住宅の建替にともなうもので、調査面積26㎡、調査期間は10月3日から12日である。整地土上で土坑や東西溝を検出したが、出土遺物は少なく、遺構の詳細な時期や性格を知ることとはできなかった。

石神遺跡東方（第212次）の調査は、石神遺跡および小壱田宮に関連した遺構の検出を目的に実施した。調査面積は336㎡、調査期間は12月12日から3月17日である。本調査区東方で実施した昨年度の調査（209次）では、東西方向の溝と塀を確認しているが、東西塀が、本調査区までは延伸していないことを確認した。

平城宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2022年度に実施した発掘調査は、平城宮跡2件（第648・652次）、平城京跡7件（第647・649～651・653～655次）である。以下、調査成果の概要を紹介する。

平城宮北辺の調査（第648次）は、特別史跡指定地内での個人住宅建て替えにともなう現状変更で30㎡を調査した。近世以降の攪乱により古代の遺構は確認できなかった。

平城宮西北部の調査（第652次）は、宮内の特別史跡指定地外での個人住宅建て替えにともなうもので18㎡を調査した。中近世の流路を検出したが、奈良時代の遺構・整地土は確認できなかった。

左京一条二坊十坪の調査（第647次）は、個人住宅建設にともなうもので、70㎡を調査した。一条条間路北側溝および大規模な落ち込みを検出した。

興福寺境内の調査（第649次）は、興福寺の境内整備事業にともなうものである。2022年度は東金堂院北面回廊を対象に335㎡の調査区を設けた。調査では単廊形式の北面回廊を桁行7間分検出した。これにより北面回廊が従来復元案よりも東へ延び、東西100m以上となることが確定した。

左京三条一坊二坪の調査（第650次）は、奈良県事業による施設建設にともなうものである。坪内の南部と北部の2か所に計686.5㎡の調査区を設けた。奈良時代の複数時期の掘立柱建物・塀を検出した。

法華寺境内の調査（第651次）は、名勝法華寺庭園の保存整備事業にともなうもので、10.4㎡を調査した。近世以前の整地土の可能性のある土層を検出した。

法華寺旧境内・海龍王寺旧境内の調査（第653次）は、宅地造成工事にともなうもので、262.6㎡の調査区を設けた。奈良時代の整地土と複数時期の建物2棟以上、近世の溝3条を検出した。

西大寺旧境内の調査（第654・655次）は、いずれも住宅建設にともなう調査である。小塔院地区の調査（第654次）では146㎡の調査区を設定し、中世の井戸・落ち込みを検出した。弥勒金堂の調査（第655次）では47.1㎡の調査区を設定し、2023年3月1日～4月4日の期間で調査を実施した。

これらの調査成果の詳細は、2023年12月刊行の『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』で報告する。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護に関する協力・支援と学術交流・研修、平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。こうした当部も、長く新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けてきたが、2022年度にいたり、ようやくその克服にめどをつけ、アフターコロナへ歩みを進めたといえる。

企画調整室が管轄する文化財担当者専門研修は、1課程を中止したものの、感染予防策を徹底しながら、各課程の定員を慎重に増やすとともに、一部研修においては、オンラインによるリモート研修をおこなうことで、14課程、のべ65日の研修を実施し、総数312名の研修生を得ることができ（特別研修1を含む）、コロナ前の水準にもどすことができた。このほか、今年度、初めて地方開催を試みた。

文化財情報研究室では、文化財情報電子化の研究と研究所事業の多言語化を進めている。文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースである全国遺跡報告総覧を研究所ホームページにて公開しており、国の内外より極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、近年には、文化財総覧WebGIS、全国遺跡報告総覧などの奈文研に蓄積された文化財情報を中核とし、国立研究開発法人 産業技術総合研究所、国土交通省国土地理院などの国内外の関係機関との連携の枠組み作りを進めている。多言語化事業に関しては、文化財担当者研修（特別研修）「文化財多言語化課程」（2023年3月10日）をオンラインでおこない、70名という多数の受講者があった。文化財の多言語化に関する関心の高さやニーズの多さを実感した。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業（相手国拠点：ウズベキスタン）、③ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

が実施する研修への協力事業がある。いずれの事業もコロナ禍のもと、現地に渡航しておこなう海外事業や海外からの招聘者を対象とした国内事業の実施はかなわなかったが、2022年度になり、③を除き、相手先との往来を再開し、所定の成果をあげることができた。

展示企画室では、従来連携してきた都城発掘調査部（平城地区）に加え、文化遺産部、埋蔵文化財センターの研究成果の展示に積極的に取り組んでいる。2022年度は、各部・センターの協力のもと、奈文研70周年・平城宮跡史跡指定100周年を記念する平城宮跡資料館春期特別展「未来につなぐ平城宮跡 ―保存運動のあけぼの―」（4月29日～6月12日）、平城宮資料館秋期特別展「地下の正倉院展 ―平城木簡年代記〔クロニクル〕―」（10月15日～11月13日）、平城宮いざない館で開催した記念特別展「のこった奇跡 のこした軌跡 ―未来につなぐ平城宮跡―」の実施に注力した。このほか、平城宮跡資料館夏期企画展「大地鳴動―大地の知らせる危機と私たちの生活―」を実施した。また、博物館・美術館の特別展や常設展を巡るインターネット生配信番組である「ニコニコ美術館」で、奈文研本庁舎、整理棟、平城宮跡資料館での秋期特別展「地下の正倉院展」（10月31日）、平城宮跡、平城宮いざない館での秋期記念特別展「のこった奇跡 のこした軌跡」（11月12日）の紹介生配信の実施に尽力した。来場者数は前者32,463、後者26,750（ともに2023年2月26日現在）となっており、大きな実績を残したといえる。なお、2022年度には、平城宮跡資料館公式ツイッターによる情報発信も開始している。

写真室では、研究所内外の調査研究における各文化財記録写真の撮影、写真データの保存管理をおこなっているほか、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法を開発している。また、文化財写真、報告書作成にかかわる文化財担当者研修を担当している。近年では、キトラ、高松塚両古墳の壁画の経年記録の撮影、法隆寺金堂壁画の撮影、第一次大極殿院南門の復原工事の記録写真の撮影等を定期的の実施している。このほか、研修動画を作成し、ACCU主催の海外の文化財担当者を対象とした研修事業の講師をリモートで務めた。これらに加え、オンラインによる各種の集会・研修や動画撮影についての協力も増えている。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室をおき、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡整備・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等の国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、また古都の旧家等に伝来した歴史資料について、奈良を中心として継続的な調査研究をおこなっている。

2022年度は主に下記の調査研究を実施した。唐招提寺では聖教第1函～第5函の調書原本校正。興福寺では第81函の調書作成。仁和寺では御経蔵聖教第108函～第110函の調書原本校正をし、また御経蔵聖教全体の成立過程に関する論文を公表した。当麻寺は經典の西17函～北3函の調書作成。薬師寺は第12函の調書原本校正。法華寺は第7函～第9函の調書作成。

また奈良市教育委員会との連携研究「大宮家文書の共同研究」や、金峯山寺関係の個人蔵資料・興福寺関係の寄贈資料等の調査をおこなった。また戦前の平城宮跡保存運動に関する展示図録、『未来につなぐ平城宮跡』を執筆・編集した。また平城宮跡の廃都後の資料に考察をくわえて論文として公表した。

その他、調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・文化庁による仁和寺聖教調査・和歌山県橋本市による出土法華経の調査に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなっている。また、古代建築の保存と復原のため、構造・技法の調査研究を、現存建物、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。

2022年度は、前年度に引き続き奈良県内の社寺建築の悉皆調査と、法隆寺金堂の古材調査をおこない、後者は2023年3月に法隆寺より報告書として刊行した。また、島根県松江市内社寺建築詳細調査をおこない、報告書を刊行した。

受託研究業務としては、和歌山県高野町の町内歴史的建造物の調査業務と新潟県佐渡市の小木町の伝統的建造物群保存対策調査を昨年度に引き続き受託し、報告書として取りまとめた。奈良県生駒市からは、市史編さんにともなう歴史的建造物調査をおこなった。島根県松江市美保関町美保関地区の伝統的建造物群保存対策調査を受託した。

このほか、各地で実施されている文化財建造物の保存、史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。今年度は、日本のスギ林業地域の文化的景観に関する比較研究のため、情報収集、資料整理をおこない、外部の研究者とともに林業に関する研究会をおこなった。その他、以前から当研究所ウェブサイトにおいて公開している日本全国的重要文化的景観選定地区の概要について、最新情報を追加した。地方公共団体からの受託研究については、京都府相楽郡和束町から和束の茶業景観における報告書作成業務を受託し、報告書の執筆・編集作業をおこない、原山地区の茶業景観に関する土地の地籍図・土地台帳のデータ化し、和束町のほぼ全域に広がる茶業景観を説明するための全覧図を作成した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備・活用と庭園について調査研究をおこなっている。

2022年度は、令和5年3月21日に本庁舎大会議室で「近世大名による遺跡の保存と顕彰」をテーマとして遺跡整備・活用研究集会をおこなった。平城宮跡の活用に関する実践的研究として、2022年度は平城宮跡史跡指定100周年にあたるため、これを記念し広報する「100周年記念ロゴ」を製作した。また、兵庫県養父市立八鹿小学校の赤米献上隊の受け入れでは令和4年春に竣工した大極門にて贈呈式をおこなった。さらに、よみがえった古代のボードゲーム「かりうち」プロジェクトではキットの製品化を進め、解説動画2本と特設サイト（奈文研ホームページ内）を製作、11月26日に朱雀門ひろばで実施したかりうち対戦試合にてお披露

目した。古墳壁画の保存活用については、特別史跡キトラ古墳及び高松塚古墳では見学と乾拓板を活用するイベントを国営飛鳥歴史公園と共催でおこなった。

庭園の調査研究については、保存管理・整備技術の研究として、既整備で実施された整備項目について報告書から情報を抽出、整理、集計し、特に護岸修理の事例収集を進めた。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡・調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究所の4室から組織されている。当センターは、文化財の調査、研究および保存に関する先進的な研究に取り組むとともに、これらの研究成果を、文化財担当者研修やワークショップにより広く普及をはかっている。

また、国や地方公共団体の要請にもとづき文化財保護に関する専門的な助言や協力をおこなっている。2022年度の各研究室の活動内容は以下のとおりである。

保存修復科学研究所では、主に考古遺物を対象とした材質分析に関する研究、それらの保存方法に関する研究を進めるとともに、装飾古墳等の遺跡に対しては環境制御にもとづく現地保存法について研究を進めた。材質分析に関する研究ではLA-ICP-MS等の先駆的分析手法を導入することで分析から得られる情報の深化をはかるとともに、既に汎用化された分析手法の妥当性、問題点について再検討を進めた。中尾山古墳赤色顔料、飛鳥坐神社大鏡、宝塚1号墳出土埴輪付着赤色顔料のXRF/分光分析データ解析、分光分析に関する基礎研究をおこなっている。

考古遺物の保存処理法に関する研究では、露出展示保存や石造物の劣化に関する環境条件の影響の検討をおこなった。

環境考古学研究室では、波怒棄館遺跡(宮城県)、金井下新田遺跡(群馬県)、保美貝塚(愛知県)、公家町遺跡・相国寺旧境内(京都府)、平城京、西橘遺跡、西大寺食堂院(奈良県)等の遺跡から出土した動物遺存体を分析した。また、宮内庁正倉院事務所と正倉院宝物の特別調査を進めている。

研究成果の発信として、日本第四紀学会や日本動物考古学会等で研究発表をおこなった。また、人材育成として、文化財担当者研修やACCU集団研修で国内外の文化財担当職員や研究者に対して環境考古学の研修をおこなった。

年代学研究室では、出土遺物、建造物、美術工芸品等の多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代学に関する研究を実施するとともに、現生木の年輪年代調査による年輪データの蓄積をおこなった。現生木調査では、東北地方における地域標準年輪曲線構築の成果を公表するとともに、兵庫県妙見スギについて試料収集を実施し、年輪変動の地域性を検討するデータの蓄積をおこなった。植生史学会・花粉学会合同大会を共催として開催した。また、各学会への発表や研修を通じて年輪年代学研究的普及をおこなった。

遺跡・調査技術研究室では、継続している古代の官衙・寺院関連資料の情報収集および整備をおこなっている。また、古代官衙・集落研究集会を開催し、研究報告資料および資料集を刊行した。考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築も一般公開を目標に整備が進んでいる。

調査現場における災害痕跡の調査・資料採取・分析・報告も進んでいる。調査手法開発としては、より効率的な三次元計測手法の検討、多チャンネル地中レーダーや高精度位置情報取得等探査技術の改良、ひかり拓本の公開普及等、自治体等で広汎に活用可能な技術を中心に研究をおこない、くわえて大型文化財用X線CT等の利用等も進めている。これらの情報提供・技術の普及を通じ、文化財保護行政に寄与する研究を推進したい。

国際学術交流

奈文研では、世界の様々な国と地域に所在する諸機関と協約・協定等を締結し、学術共同研究や交流・協力事業を展開している。2022年度は、数年ぶりに海外渡航を再開するとともに、コロナ禍の中で培ったノウハウを生かし、オンラインツールによる取り組みも継続した。

中国については、中国社会科学院考古研究所との北魏洛陽城出土遺物の整理研究および学術交流、河南省文物考古研究院との窯跡出土遺物等の共同研究、遼寧省文物考古研究院との三燕文化遺物の共同研究、復旦大学および大足石刻研究院との三者による大足石刻保護に関する共同研究、中国社会科学院古代史研究所および河北師範大学との木簡・簡牘の共同研究を進めている。

韓国については、国立文化財研究院と「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および発掘調

査交流を継続している。また国立益山博物館と学術交流に関する協約書を結んでいるほか、慶北大学校と木簡に関する共同研究をおこなっている。

カンボジアについては、アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構（APSARA）と共同で、2002年よりアンコール・トム内の西トップ遺跡の調査研究および保存修復事業、人材育成事業などを多角的に進めている。カザフスタンについては、2022年3月に文化庁委託事業「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を完了した後も継続して技術移転事業をおこなっている。2022年4月からは、ウズベキスタン・サマルカンド所在の国際中央アジア研究所およびサマルカンド考古学研究所と共同で、文化庁委託事業「ウズベキスタンにおける考古遺産の科学的調査に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を実施中である。モンゴル国立文化遺産センターとは、東文研をくわえた三者による合意をもとにした交流を継続している。台湾の中央研究院歴史語言研究所とは、木簡・簡牘の研究資源化についての交流を進めている。

上記のアジア諸国にくわえ、英国に所在する三機関との学術交流を、近年活発におこなっている。セインズベリー日本藝術研究所とは日本考古学の国際的発信を進めており、ケンブリッジ大学およびヨーク大学とは、欧州研究会議や日本学術振興会の助成を受けた共同研究を推進している。以上に加え、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）がおこなう研修への協力を継続している。

公開講演会

◆平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウム「平城宮跡の過去・現在・未来」

令和4年6月25日（土）

【会場参加 328名】

■講演 「平城宮跡の調査研究・公開活用と奈良文化財研究所」

東京大学名誉教授 佐藤 信

■講演 「平城宮跡の史跡指定」

文化遺産部長 内田 和伸

■講演 「奈文研による発掘調査」

都城発掘調査部 平城地区考古第二研究室長 神野 恵

■講演 「平城宮跡の活用と未来」

企画調整部 展示企画室長 岩戸 晶子

◆奈良文化財研究所第14回東京講演会「高松塚古墳壁画を伝える一発見から石室解体、修理を経て」

令和4年10月22日（土）

【会場参加 178名】

■講演 「世紀の発見、壁画の劣化そして石室解体に至るまで」

奈良文化財研究所 副所長 高妻 洋成

■講演 「石室解体事業と発掘調査

一国宝壁画の救出」

奈良文化財研究所 都城発掘調査部飛鳥・藤原地区 考古第一研究室長 廣瀬 覚

■講演 「高松塚古墳壁画の材料調査」

東京文化財研究所保存科学研究センター分析科学研究室長 犬塚 将英

■講演 「壁画の保存修復

一国宝絵画としての修復処置」

東京文化財研究所 保存科学研究センター修復材料研究室長 早川 典子

■講演 「高松塚古墳の仮整備と公開活用」
奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室長 中島 義晴

■講演 「総合討論 高松塚古墳壁画と文化財保護（これからの高松塚古墳）」

東京文化財研究所 所長 齊藤 孝正

奈良文化財研究所 所長 本中 眞

東京文化財研究所 副所長 早川 泰弘
奈良文化財研究所 副所長 高妻 洋成
東京文化財研究所 保存科学研究センター長 建石 徹

科学研究費助成事業等

◆植物考古学から探るイネ、雑穀、ムギ食文化の交流と変容

庄田 慎矢 学術変革領域研究（A）計画研究

◆木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開

馬場 基 基盤研究（S）

◆災害で埋没した建物による民家建築史の研究

箱崎 和久 基盤研究（A）

◆東北アジアの農耕化過程における食と調理の変化への考古生化学的アプローチ

庄田 慎矢 基盤研究（A）

◆南都の未整理文書聖教にもとづく寺社とその周辺社会の調査研究

吉川 聡 基盤研究（B）

◆松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築

難波 洋三 基盤研究（B）

◆中央アジア 天山―パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究

国武 貞克 基盤研究（B）

◆ユーラシア東部における細石刃石器群の出現と拡散：中国北部クロスロード仮説の検証

加藤 真二 基盤研究（B）

◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による大和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体制の研究

清野 孝之 基盤研究（B）

◆埴輪の生産・流通体制の総合的検証にもとづく王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明

廣瀬 覚 基盤研究（B）

◆古代都城から出土する製塩土器の生産地推定

神野 恵 基盤研究（B）

◆土製鋳型を中心とした冶金関連資料による東アジア冶金史学の構築

丹羽 崇史 基盤研究（B）

◆古建築用語の相互訳及び英訳を通した系統的把握による東アジア木造建築史の基盤構築

鈴木 智大 基盤研究（B）

◆古代官衙における空間構造の変遷と展開に関する実証的研究

小田 裕樹 基盤研究（B）

◆古代における年輪年代学的木材産地推定を可能にする標準年輪曲線ネットワークの整備

星野 安治 基盤研究（B）

◆平城宮跡・藤原宮跡・飛鳥宮跡における風景の再現・創造・継承に関する計画論的研究

本中 眞 基盤研究（B）

◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化

国武 貞克 国際共同研究強化（B）

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査

西田 紀子 基盤研究（C）

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

山本 崇 基盤研究（C）

◆近世における北前船と東北産木材の流通に関する年輪年代学的研究

光谷 拓実 基盤研究（C）

◆近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承―出雲地方を中心に

中島 義晴 基盤研究（C）

◆鎖国期日本のマジョリカ陶器色絵フゾグリー文アルパレルロとカトリック修道院

松本 啓子 基盤研究（C）

◆塩類風化が進行する遺跡構成材料からの効果的な脱塩方法の開発

脇谷 草一郎 基盤研究（C）

◆ポスト・バイオン期のクメール建築の建築的特徴に関する研究

大林 潤 基盤研究（C）

◆日本と中国における大工道具の比較による東アジア木造建築技術史の基盤構築

李 暉 基盤研究（C）

◆山口県域の銅生産・銅銭鑄造関係古代出土文字資料を用いた政治・社会的地域特質の解明

竹内 亮 基盤研究（C）

◆絵画表現の多様性を生みだす彩色材料のナノ構造

杉岡 奈穂子 基盤研究（C）

- ◆東アジア出土の植物灰ガラスは西アジア産か？—ガラス交易路解明に向けての基礎研究— 田村 朋美 基盤研究 (C)
- ◆古墳に埋葬された鉄製文化財の腐食は予測可能か？—数値解析による現地保存評価の確立 柳田 明進 基盤研究 (C)
- ◆古代における食文化の実態解明に関する環境考古学的研究 山崎 健 基盤研究 (C)
- ◆三次元データで拓く木簡研究の新地平 山本 祥隆 基盤研究 (C)
- ◆3次元デジタル技術を活用した古代瓦葺技術の系譜と展開に関する考古学的検討 岩戸 晶子 基盤研究 (C)
- ◆植物遺体群からみた古代都城における草本植物相に関する基礎的研究 上中 央子 基盤研究 (C)
- ◆出土漆塗膜の模擬試料作成の試み—より安定的な保存処理法の開発のために 楊 曼寧 基盤研究 (C)
- ◆大嘗宮にみる宮中祭祀施設の配置・造営計画に関する研究 福嶋 啓人 基盤研究 (C)
- ◆近代庭園における遺跡由来石造物の取り扱いとインタープリテーションに関する研究 内田 和伸 基盤研究 (C)
- ◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発 村田 泰輔 挑戦的研究 (開拓)
- ◆XR技術を活用した発掘・被災文化財保護現場のデジタルトランスフォーメーション 金田 明大 挑戦的研究 (開拓)
- ◆埴輪ハケメの年輪年代学：年輪年代学的同一材推定を応用した埴輪同工品の認定 星野 安治 挑戦的研究 (萌芽)
- ◆後期旧石器時代開始期の日本列島における新人到来研究の革新 国武 貞克 挑戦的研究 (萌芽)
- ◆新しい遺跡を発見する：機械学習による自動地形判読手法の開発 高田 祐一 挑戦的研究 (萌芽)
- ◆出土カンボジア漆分析に関する学際的研究 佐藤 由似 挑戦的研究 (萌芽)
- ◆X線CTを用いた非破壊観察による固着資料の文字復元 上梶 英之 挑戦的研究 (萌芽)
- ◆シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究 山藤 正敏 若手研究
- ◆アンコール王朝の終焉と陶磁器需要の変容に関する考古学的研究 佐藤 由似 若手研究
- ◆墨書木製品の分類を手がかりとした日本における木簡利用全史の解明 藤間 温子 若手研究
- ◆古代壁画の制作技法の伝習に関する研究—シルクロード近隣地域と日本の壁画を中心に 中田 愛乃 若手研究
- ◆文化的景観における棚田集落の相対的価値の解明にむけた比較研究 恵谷 浩子 若手研究
- ◆石造物からみるブリテン島における古代と初期中世の境界 岩永 玲 若手研究
- ◆玉類の流通からみた弥生・古墳時代併行期の日韓交渉 谷澤 亜里 若手研究
- ◆西日本集落遺跡の分析に基づく古代地域社会の実証的研究 道上 祥武 若手研究
- ◆飲食物表現からみた古代東アジアにおける古墳葬送儀礼の考古学的研究 松永 悦枝 若手研究
- ◆文化財修理に用いられる和紙の膨潤収縮挙動 金 旻貞 若手研究
- ◆出土木製遺物の保存処理の飛躍的効率化を実現する溶媒蒸発を用いた薬剤含浸技術の確立 松田 和貴 若手研究
- ◆考古系展示施設における観覧行動分析とそれに基づく多様な「学び」の構築と実践 廣瀬 智子 若手研究
- ◆越後大工・小黒空右衛門一族の作風—近世在方大工の作家論的研究 目黒 新悟 若手研究
- ◆『築山庭造伝』前編・後編にみる作庭技術とその流布に関する基礎的研究 高橋 知奈津 若手研究
- ◆日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研究 呉 修喆 若手研究
- ◆大破した寺院聖教の保存・活用にむけた調査方法に関する研究 橘 悠太 若手研究
- ◆3Dデジタル技術等の多角的応用による土器製作者の動的身体技法復元のための基礎研究 平川 ひろみ 若手研究
- ◆残材と周辺植生に基づく古墳時代集落における木材調達とその利用に関する研究 浦 蓉子 若手研究
- ◆考古生化学から探る古代日本の土器利用 村上 夏希 若手研究
- ◆人工知能 (AI) による深層学習を活用した縄文原体の素材同定 高野 紗奈江 研究活動スタート支援
- ◆近代における日本人産婆の越境実態の検証—渡韓産婆の事例を通じて— 厩 素妍 研究活動スタート支援
- ◆平安京・大和国における瓦生産・流通構造—9～12世紀を中心に— 田中 龍一 研究活動スタート支援
- ◆顕在化した遺跡である古墳が持つ顕著な文化財的価値とその現在の利活用に関する研究 川畑 純 研究活動スタート支援
- ◆戦後文化財修理としての桂離宮御殿整備工事の研究—合成樹脂を始めとした新技術の導入 高野 麗 研究活動スタート支援
- ◆中央アジアの雑穀をめぐる料理と物質文化の考古生化学的研究 庄田 慎矢 特別研究員奨励費
- ◆燈謎——漢字文化圏文字遊戯の諸相 呉 修喆 研究成果公開促進費 (学術図書)
- ◆全国遺跡報告総覧 高田 祐一 研究成果公開促進費 (データベース)
- ◆歴史災害痕跡データベース 村田 泰輔 研究成果公開促進費 (データベース)
- ◆奈良の都の木簡に会いに行こう！2022 馬場 基 ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備と情報発信

例年同様、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言等をおこなった。

国土交通省による大極殿院の復原工事は、南門（大極門）が2021年度で竣工して、2022年度からは東楼の工事がスタートし、施工業者は竹中工務店となった。そうしたなかで各種の調整をおこない、工事工程の写真撮影業務は竹中工務店から受託することとなった。工事関係者による定例会議は毎月2回開催され、それに対応するとともに、月初の定例会議にともなっておこなわれる勉強会では、東楼の発掘調査成果や復原の考え方など、計4回にわたり講師を務めた。また東楼のパンフレットや解説ボランティア向けの解説集など国土交通省が作成した資料について学術的観点からの確認・助言をおこなった。また、東楼の軒瓦の文様や瓦の大きさは南門とは異なるため、瓦製作のための出土遺物の詳細な調査が必要となり、それに対応した。

東楼の現地での工事は夏頃には始動し、基礎工事にもなう掘削作業にあたっては、遺構の確実な保護の確認のため、現地の立会調査で対応した。

2010年から進めている第一次大極殿院の復原研究は、都城発掘調査部遺構研究室を中心に、復原研究の報告書作成を進めた。また、東楼に取り付ける屋根まわりの飾金具について、次年度に受託研究にて製作することができるよう調整を進めた。

平城宮いざない館の活動については、2018年の開館以来、第4展示室の展示の学芸業務を中心に、国土交通省国営飛鳥歴史公園ならびに管理センターに協力をおこなっており、これを2022年度も継続した。

このほか、文化庁がおこなう平城宮跡の整備管理業



東楼の遺構についての勉強会（2022年8月4日）

務、歴史的環境維持業務等について、助言をおこなうとともに、現地において調整・対応した。（箱崎和久）

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

国営飛鳥歴史公園内に設置の仮設修理施設において、高松塚古墳壁画の現状の把握と材料等に関する知見を得るための調査研究を進めている。

本年度は石室解体報告書作成、石室解体に関する映像記録のデジタルアーカイブと映像コンテンツの作成、発見時のデータより復元した三次元モデルの作成をおこない、VRコンテンツを作成した。また、XRF（蛍光X線）やXRD（X線回折）、可視分光分析などをおこない、壁画の色材についての基礎的な情報収集をおこなった。

また、装飾古墳における保存管理や活用の状況、環境モニタリング等の研究をすすめ、石室石材の安定化のための輸送を想定した石材固定フレームの要件の検討、漆喰および凝灰岩を安定して保管するための物理的性質に関する調査を進めた。

また、公開普及事業として文化庁の一般公開に協力し、作成した乾拓板による体験会を実施した。

（金田明大）

●キトラ古墳に関する調査研究

保存・活用に関する事業では、出土棺材漆片等の遺物の適切な保存をおこなうための研究と保存・活用のための必要な措置、発掘調査により得られた資料及びデータの公開に向けた整理とアーカイブ化、壁画取り外し後の墓道・石室の調査成果の整理・検討、整備した古墳の活用に関する取組、壁画の現地保存を検討するための類例調査、壁画の図像検討のための光学調査等を実施した。

壁画の安定化に関する事業では、壁画を安全に測定できる可搬式のX線回折装置および分光分析装置を用いた壁画の保存・活用に資する研究、中長期の壁画の状態変化を評価するため高精細カメラによる記録作成、三次元計測実験等を実施した。

キトラ古墳壁画保存管理施設では、研究員が常駐して展示室等における温度や湿度などの日常管理および運営をおこなうとともに、施設内の環境調査、壁画および出土遺物等の公開等を実施した。（清野孝之）

現地説明会

◆令和4年8月6日（土）

藤原宮大極殿院の発掘調査（飛鳥藤原第210次調査）

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）

研究員 道上 祥武

参加者 468 人 調査面積 565 m²

◆令和4年10月15日（土）

興福寺東金堂院北面回廊の発掘調査（平城第649次調査）

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部（平城地区）

研究員 垣中 健志

参加者 1,120 人 調査面積 331 m²

◆令和5年1月20日（金）

平城京左京三条一坊二坪の発掘調査（平城第650次調査）

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部（平城地区）

研究員 浦 蓉子

参加者 317 人 調査面積 686.5 m²

2 展示・公開

飛鳥資料館の展示

◆ミニ展示「飛鳥資料館に寄贈された瓦 一瓦の花咲く飛鳥資料館―」

2022年4月22日～5月22日

奈良県内の寺院から出土した瓦のほか、大阪府や千葉県など、飛鳥地域から遠く離れた古代寺院の資料を一同に展示した。寄贈された瓦を中心に、これまであまり展示機会のなかった資料を公開活用した。会期中の入館者数3,268人。

◆夏企画展

「第13回写真コンテスト「高松塚古墳」作品展」

2022年7月15日～9月11日

国宝高松塚古墳壁画の発見50周年を記念して、高松塚古墳をテーマに、過去・現在・未来に思いを馳せた自由な発想による作品を募集した。応募作品の全点を会場に展示し、審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数2,912人。応募77点。

◆秋期特別展「飛鳥美人 高松塚古墳の魅力」

2022年10月21日～12月18日

国宝高松塚古墳壁画の発見50周年を記念して、壁画と出土品の魅力にあらためて迫るとともに奈良文化財研究所を中心とした近年の調査研究成果を紹介した。前田青邨監修の壁画模写、高松塚古墳記念切手の製作関係資料、昭和48年撮影8mmフィルム映像などを展示した。会期中の入館者数7,280人。図録『飛鳥美人 高松塚古墳の魅力』刊行。



◆冬期企画展「飛鳥の考古学2022」

2023年1月20日～3月12日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。飛鳥京跡苑池、甘檜丘遺跡群、藤原宮大極殿院、石神遺跡など、飛鳥藤原地域の2021年度の発掘調査成果と、藤原宮・本薬師寺等出土変形忍冬唐草文軒平瓦の研究成果などを展示した。ギャラリートークを2回開催した。会期中の入館者数3,360人。カタログ『飛鳥の考古学2022』刊行。

平城宮跡資料館の展示

◆春期特別展 平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所70周年記念

「未来につなぐ平城宮跡―保存運動のあけぼの―」

2022年4月29日～6月12日

遷都し平安時代に廃絶、その後存在を忘れかけられていた平城宮跡。明治時代、大極殿標本建設を皮切りとして都跡村など地元の有志によって顕彰・保存運動が興り、史跡指定へとつながる。平城宮の姿を現在に伝える契機となった近代における官民の初期の保存運動を紹介。会期中の入館者数7,893人。図録刊行。

◆夏期企画展

「大地鳴動―大地の知らせる危機と私たちの生活―」

2022年7月16日～8月28日

「考古・文献資料からみた歴史災害情報の収集とデータベース構築・公開ならびにその地質考古学的解析」事業（2019～）等の成果を紹介。発掘調査によって発見された地割れや液状化現象などの地震痕跡を地層転写法によって保存した剥ぎ取り資料を展示。会期中の入館者数4,106人。

◆秋期特別展 奈良文化財研究所70周年記念・平城宮跡史跡指定100周年記念

「地下の正倉院展―平城木簡年代記〔クロニクル〕―」

2022年10月15日～11月13日

奈文研の歩みとともに60年以上に渡る平城宮・京跡での木簡出土の調査の足跡を振り返りつつ、各年代を代表する木簡を通じて奈文研の木簡研究の来し方について紹介。会期中、奈文研の紹介と特別展の展示解説をインターネットで生配信。会期中の入館者数7,628人。図録刊行。

◆奈良文化財研究所70周年・平城宮跡史跡指定100周年記念特別展

「のこった奇跡のこした軌跡—未来につなぐ平城宮跡—」

於：平城宮いざない館

2022年10月29日～12月11日

創立70周年を迎えた奈文研の設立以降の戦後の平城宮跡の調査・研究の歩み、遺跡整備や活用のありかた、平城宮跡の調査研究の中心を担ってきた奈良文化財研究所の活動について紹介。会期中に平城宮跡と特別展の展示解説をインターネットで生配信。会期中の入館者数36,339人。図録刊行。



解説ボランティア事業

平城宮跡解説ボランティア事業は、平城宮跡に来訪される方へ、平城宮跡の理解を深めていただけるよう

平城宮跡資料館を中心に第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園、平城宮いざない館の定点で案内解説をおこなっている。1999年10月から実施しているが、2023年3月31日現在解説ボランティアの登録数は121名である。

2022年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数282日間）

各定点において解説を受けた来訪者延べ人数							解説をした平城宮跡 解説ボランティアの 延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	平城宮 いざない館	計	
9,538人	12,788人	5,666人	12,938人	5,605人	10,629人	46,535人	3,077人

2023.3.31 現在

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスをおこなっている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。



学術情報リポジトリの画面

公開データベース一覧		2022年度 件数
1	史的文字DB	108,586
2	木簡庫（各国語含む）	61,397
3	木簡字典・電子くずし字字典連携検索	※ 1
4	木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	185,127
5	木簡人名データベース	1,659
6	全国木簡出土遺跡・報告書DB	1,302
7	和同開珎出土遺跡DB	1,404
8	平城京出土陶硯DB	887
9	3D Bone Atlas Database	※ 1
10	遺跡DB	6,700
11	古代地方官衙関係遺跡DB	※ 1
12	古代寺院遺跡DB	※ 1
13	官衙関係遺跡整備DB	※ 1
14	古代地名検索システム	10,967
15	Japanese Garden Dictionary	※ 1
16	薬師寺典籍文書DB	1,012
17	大宮家文書DB	558
18	所蔵図書DB	115,432
19	全国遺跡報告総覧	8,898,035
20	遺跡報告内論考データベース	※ 1
21	学術情報リポジトリ	26,702
22	文化財総覧 WebGIS	529,782
23	奈良文化財研究所収蔵品データベース （日・多言語合算）	5,994
24	軒瓦三次元計測データベース	
25	3D DBViewer	※ 1
26	3D データベース : Sketchfab	※ 1

※ 1 アクセス数のカウントをしていない

3 その他

刊行物

刊行物（2022年度）

- ・学報第71冊『飛鳥池遺跡発掘調査報告』本文編〔Ⅲ〕
- ・学報第102冊『文化財論叢Ⅴ 奈良文化財研究所創立70周年記念論文集』
- ・研究報告第35冊『古代但馬国関係出土文字資料集成』本文編・図版編
- ・研究報告第36冊『第25回古代官衙・集落研究会報告書 古代集落の構造と変遷2』
- ・研究報告第37冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用5』
- ・研究報告第38冊『文化財多言語化研究報告3』
- ・飛鳥資料館図録第75冊『飛鳥美人 高松塚古墳の魅力』
- ・飛鳥資料館カタログ第39冊『飛鳥の考古学2022』
- ・『奈良文化財研究所紀要2022』
- ・『奈文研ニュース』No.85～No.88
- ・平城宮発掘調査出土木簡概報（四十六）
- ・『松江市内社寺建築詳細調査報告書』
- ・『移築された遺跡由来の遺構および石造物の現状と課題 令和3年度 遺跡整備・活用研究集会報告書』
- ・『第26回古代官衙・集落研究集会 古代集落の構造と変遷3 研究報告資料』

- ・『第22回シンポジウム「奈良末～平安初期の軒瓦」』発表要旨
- ・文化財をしらべる・まもる・いかす ―国立文化財機構 保存・修復の最前線―
- ・NABUNKEN: A Walk Around the Institute（巡訪研究室―奈文研へのご招待―）
- ・巡訪研究室 ―来自奈文研的邀请―（NABUNKEN: A Walk Around the Institute / 巡訪研究室―奈文研へのご招待―）
- ・巡訪研究室 ―来自奈文研的邀请―（NABUNKEN: A Walk Around the Institute / 巡訪研究室―奈文研へのご招待―）
- ・순방연구실―나라문화재연구소로부터의 초대―（NABUNKEN: A Walk Around the Institute / 巡訪研究室―奈文研へのご招待―）
- ・『未来につなぐ平城宮跡 ―保存運動のあけぼの―』
- ・『地下の正倉院展―平城木簡年代記〔クロニクル〕―』
- ・『のこった奇跡のこした軌跡―未来につなぐ平城宮跡―』

